

シネマ日記



No. 56

○月×日 スペイン第2の都市バルセロナの貧民街。中国人の出稼ぎ労働者たちが海賊版のバッグを作り、これまた不法移民のアフリカ・セネガル人が売りさばく。そんな裏社会で、彼らの稼ぎをかすめ取る仲介屋を生業としている男（ハビエル・バルデム）だが、ドラッグに溺れ精神を病み娼婦のような生き方をしてる妻に代わり、幼い二人の愛児を大切に育てている別の貌も持っている。しかし、子供に単語の綴りを聞かれ、「B-U-T-T-E-R-F-U-L/ビューティフル」（アレハンドロ・イニャリトゥ監督）と「発音とおり書けばいいんだよ」と教えながらも、自らはbeautifulと正しく

鹿村では、300年も続く「村歌舞伎」が今も実際に行われている。「大鹿村騒動記」（阪本順治監督）は、歌舞伎上演に情熱を注ぐ村人たちを描いた群像喜劇。劇場公開直前に急逝した主演の原田芳雄が映画化に傾注してきたというだけあって、見事な遺作になった。原田演じる食堂の店主・風祭善のもとに、かつて親友だった男と駆け落ちした妻・貴子が戻ってきた。18年の時が流れていたのだが、貴子は認知症で記憶が喪われていた。折も折、村では数日後の歌舞伎上演に備えて稽古の真只中。妻にも、昔のように歌舞伎に出てもらえば、記憶が甦るかもしれない…。出し物は「景清」。善の十八番だ。源氏に捕らわれている平家の落ち武者・景清の前に、今は源氏に嫁いだ妻の道楽が出てくる。舞台の袖で貴子は思わず呟く。「許してもらわなくてもいいから」と。それを聞いた原田芳雄の表情が何ともいえない。惜しい個性俳優を喪ったものだ。「一度目は悲劇、二度目は喜劇」。歌舞伎と実生活、虚と

教えられない。父母との不幸な別れから、孤児として育ち教育も受けてこなかったからだ。警官に賄賂を渡し、アフリカ人たちの路上販売を見逃してもらっているのだが、一斉逮捕に追い込まれ、また中国人たちの地下工場も全員がガス中毒死に遭う。そんな追い詰められた日々の中、余命2カ月の末期がんを宣告されてしまう…。残りの人生をどう生きたらいいのか。妻や子供、さらには中国人やアフリカ人たちの幼い連れ子たちに対し自分には何が。美しく「生きるには。沢木耕太郎は映画評で、この男が「西洋絵画の中のイエスの姿に似て見えてくる」と書きつつ、受難を一身に背負いながらもイエスと違って「誰も救うことができない」と。2000年後、世界はどう変わってしまったのかと思う。現代のグローバル化した世界にあつては観光客が押し寄せるバルセロナにも、多数のアフリカ人や中国人が蠢いている絶望的な状況に驚かされる。

○月×日 南アルプス・塩見岳の山懐に抱かれた大

実がないまぜになって、村歌舞伎は大団円へ向かう…。○月×日 「蜂蜜」（トルコ、セミフ・カプランオール監督）は父子の絆の物語。6歳の少年はいつも父と一緒に。ある日、森の奥に蜂を探しに行った父が帰ってこなかった。その日を境に少年は言葉を失ってしまった。悲しみに暮れる母に心配をかけまいと、少年に自立の心が芽生える…。深い森に、自然の音のみが聞こえ、光と闇の対比が美しい。詩情あふれる作品だ。

○月×日 「コクリコ坂から」（アニメ、宮崎吾朗監督）は、東京五輪直前の横浜が舞台の学園青春物語。まだ戦後の混乱が残る中、男女高校生の恋心に、出生の秘密がからむ。老生には石坂洋次郎の「青い山脈」を思い出した。ただ、ノスタルジーに語りかける割には意図が弱く伝わらない。「デンデラ」（天願大介監督）は姨捨山に捨てられた老婆たちが団結して、アマゾン軍団となり村人を襲う物語。あの浅丘ルリ子や山本陽子の「老婆」ぶりは正直見るのは辛い。（内藤 哲